

【お客様各位】

IPv6回線環境における GJ-DDNS(IPv4)の利用について

株式会社グラスフィアジャパン

初版： 2022/7/29

IPv6回線環境でGJ-DDNSを利用する条件

※現在GJ-DDNSはネイティブなIPv6通信に対して未対応です。
従ってV6プラス(IPv4 over IPv6)で変換する必要があります。

- (1) 回線契約がV6プラス(IPv4 over IPv6)であること。
- (2) MAP-E対応ルーターを用意すること。
- (3) HTTPポート、サーバーポート、RTSPポートを指定し、
デバイスへのポート番号変更設定と、
ルーターにNAT/NAPT設定を入力すること。

IPv4 over IPv6 (V6プラス)

IPv6の通信網でIPv4を用いた通信を実現するように考えられた技術が「IPv4 over IPv6」

「V6プラス」が代表的な IPv4 over IPv6のサービス名となる。

デメリット

基本的にIPv4のグローバルIPは各契約者でシェアして利用しているため、グローバルIPの占有/固定などができない。

IPv6（ネイティブ）

最新のIPプロトコル規格。

IPsecが標準仕様となるのでセキュリティ面が向上。

端末が持つMACアドレスを元に自動生成される。

しかしIPv4と相互通信が出来ないデメリットも存在する。

利用者側のCEルーターで NAT/NAPTを設定可能な通信方式

IPの割り当て場所もルーターとなる。

ユーザー側でどのポート番号が選択可能か調査する必要がある。

ISPから各契約者に割り振られたポートのみ選択可能。

契約者どうしでユーザー(CEルータ)を識別処理。

【DS-lite】 ※GJ-DDNS利用不可

ISP側のPEルーターで NAT/NAPTを行う通信方式

IPの割り当て場所は**ISP側**

ユーザー側でポート開放などの指定が**出来ない**。

基本的にNAT/NAPTする**場所が違う**だけで
MAP-Eと大きな違いはない。